5万トン時代へ

青森リンゴ輸出

10

WTOへの加盟転機に

台湾の輸入 劇的増加

昭和後期の高度成長期は国内需要が十分あり、輸出は低調だった。しかし、1990（平成2）年に実施されたリンゴ果汁の輸入自由化によって加工リンゴによる需給調整が次第に難しくなってきたことや、国内市場がバブル崩壊で消費が減退してきたことがきっかけとなり、再び輸出に関心が向けられた。

平成初期の輸出は96（平成8）年で20万箱程度（生産量の0・7％）と戦前に記録した100万箱を超える量には遠く及ばないものであった。しかも97年にピークを迎える東南アジアの通貨危機で東南アジア市場の多くが安価な中国産に切り替わっていったため、輸出用品種の切り替えが行われた。

95年の輸出用品種の構成は、陸奥43％、世界一27％、金星15％、王林7％、ふじ5％と大玉高級品種が中心であった（現在はふじが5割程度）。

台湾ではこの時期、輸入割当制（400トンから順次拡大され2千トンまで）だったので、贈答用や神仏供養に用いられた輸入リンゴの需要は、高級品種に集中した。これが、実は青森リンゴの高級ブランド確立につながっている。

台湾市場にはアメリカ、チリ、ニュージーランドなど世界中のリンゴが集まるが、青森リンゴのような高級品種を持っている国は日本以外にない。

こうした状況の中で、台湾向け輸出が大きな転機を迎える。2002年1月1日、台湾がWTO（世界貿易機関）に加盟した。これによって輸入割当制が撤廃され、関税が50％から20％に削減、貿易業者の自由な参入が実現した。

台湾向け輸出は劇的な変化を遂げている。輸入割当制時代は最大1700トン程度のものが、WTO加盟2年目で1万トンを超えたのである。その後も順調に拡大し、07年に2万3878トンに達している。

もともと台湾は日清戦争後の50年間、日本の植民地であったこともあって親日家が多い。メイド・イン・ジャパンへの憧れなど、多様な要素がかみ合って、青森リンゴが台湾で一気に花開いた感じだ。

（県りんご輸出協会事務局長　深澤守）

台湾・台北市のスーパーで市場調査する本県リンゴ関係者＝2012年12月